

石井米雄先生とのふれ合い

菊池 光興
国立公文書館

平成22年2月12日、当館のアジア歴史資料センター長石井米雄先生が逝去されました。今年の正月明けの時点で石井先生は、「1月と3月には研究調査のためにタイなどへの海外旅行を予定しているんだ」と語っておられましたし、「これから3冊の本を出版する予定だけれど、まだ1冊分しか原稿が纏まってないので、もっと頑張らなければならない」と力強く抱負を述べておられました。それだけに今回の余りにも急なご逝去は、先生ご自身を含め誰も予想することができなかった不幸な出来事であり、私たち国立公文書館関係者にとっては痛恨極まりのない打撃でありました。私自身も石井先生という偉大な指導者を失った大きな喪失感をまだ十分克服していませんが、先生から頂戴した様々なご指導やご高配に深く感謝しながら、心からご冥福をお祈り申し上げる次第です。

石井先生には、平成13年11月30日にアジア歴史資料センターが国立公文書館に設置された時からご逝去の日まで、8年余りの長い期間一貫してセンター長をお勤めいただきました。その間平成16年から20年までの4年間は、先生は、大学共同利用機関法人人間文化研究機構の機構長という重要な役職に就任されましたが、大変ご多忙の中にあってもアジア歴の仕事、さらには国立公文書館本体の業務についてまで情熱を傾

けて熱心に取り組んでいただきました。「私のセンター長在任も随分長くなったけど、菊池さんが公文書館長をやってる間は、なんとか続けて協力しますよ」とおっしゃって、結果的には私の方が先に退任することになってしまいましたが、石井先生の温かいご配慮に厚く御礼を申し上げますのであります。

顧みますと石井先生とアジア歴とのかかわりは、アジア歴設置の7年余りも前に遡ります。終戦50年目を迎える前年の平成6年夏の「村山内閣総理大臣談話」に基づく「平和友好交流計画」の中で「アジア歴史資料センター」の設立の検討が謳われました。そして、この設立検討のための有識者会議が設けられ、石井先生は、石川忠雄先生等と共にその中心メンバーとして政府への提言を取りまとめられました。この提言は平成7年6月30日に内閣官房長官に提出されましたが、その後、行財政改革の行方、所管省庁問題、連立政権の組替え、近隣諸国との歴史認識問題の発生、さらには情報技術・電子情報化の進展など、多くの分野に於ける紆余曲折が続き、アジア歴のオープンまで長い年月を要しました。石井先生はこのような困難な状況下においても粘り強く関係方面への働き掛けを続けられた結果、平成11年11月30日にやっと「アジア歴史資料整備事業の推進について」閣議決定を見たのであります。しかし、この閣議決定からアジア歴の開設まで丸2年を要し、その間も石井先生は様々なご苦勞を重ねられたのです。まさに、ア

菊池 光興 (きくち みつおき)
独立行政法人国立公文書館前館長。

ジ歴の産みの親と呼ぶべきご功績です。それでも石井先生は、いつも「アジ歴誕生の功績者は、私などではなく、内閣官房の古川副長官、谷野外政審議室長など多くの方々です。恩を忘れず、いつも深く感謝しなければなりません。」と極めて謙虚に述べられるのでした。このような爽やかで高ぶらないお人柄が、石井先生の大きな魅力の一要素でありました。

もう少し個人的な思い出を語ります。

石井先生は、昭和30年から10年間外務省に勤務され、32年からタイの日本国大使館に赴任され、チュラロンコン大学で外務留学生の生活を送られたとのことでした。私が昭和42年に総理府に入り初めての任務として沖縄返還の關係の業務を担当していたころ、外務省北米1課にタイ語を専攻され、プミポン国王のご訪日の際などに天皇陛下の通訳を仰せつかった吉川英男さんという方がおられたことを思い出して、もしかして御存じかどうかお尋ねしました。「エッ、菊池さん吉川さんをご存じだったのですか。吉川さんは、私のタイ語の先生ですよ。タイの社会の權威で色々の事を教わりましたよ。アジ歴に来て、吉川さんを知っている方に会えたのは、ほんとに嬉しい。」と大変喜んでくださいました。

またある時は、石井先生が外務省に奉職後、昭和33年にタイ留学派遣中に仏教僧として得度されたお話をお聞きしました。タイのプミポン国王が得度をして僧侶の生活を送られた權威あるポーウォンニウェート寺院で得度をしてもらえることになったのですが、「たとえ留学生の資格であっても日本大使館に所属している外交官が僧侶となって出家生活を送るなどとは、とんでもない。」となかなか上司から許しを得られなかったそうです。そんな中で「面白いじゃないか。タイの男性は一生に一度は僧侶になることが決まりになっているのだから、大使館員が出家してタイの国民がどのような考え方で、

どんな宗教的な生活を送るかを体験することは、我が国の対タイ政策、対東南アジア政策のためにも有意義だろう。」と支援してくれた太っ腹の参事官がおられたとのお話でした。その参事官の名前は高瀬さんという方で、石井先生は「私の今日は、高瀬さんのお陰です。何せ私の学位論文はタイの上座部仏教と社会の關係についてですから、タイでの得度の体験がなければとても考えられません。」と今もって感謝しておられたのです。「その方はもしかして、高瀬侍郎さんですか。後でビルマ大使をされた……」とお尋ねすると、「そうです。菊池さんはどこで高瀬さんをお知りになったのですか。」とのお尋ねが返ってきました。「昭和43年に沖縄の本土復帰に備える日米琉諮問委員会が設けられ、高瀬大使がビルマから帰られて日本政府代表にお就きになりました。佐藤・ジョンソン首脳会談で決まった組織なので關係法律の立案や国会審議も比較的順調に進みました。私は当時役人になってまだ2年足らずの若造でしたが法案の立案や法制局審査に関わったということで、高瀬大使に目をかけていただきました。大使は『本官は従来あまり下々の官吏とは言葉を交わさなかったが、貴官には政府代表の設置法で世話になったから、話をする事とする。』というようなことを言われました。戦前からの大日本帝国の外交官ですね。でも、すっきりした方でした。」と申し上げると、石井先生は「その通りです。でも大変情の厚い方で、私の得度式の時はずいぶん寺院まで出向いて、長時間儀式に参列していただくというようなこともあったのですよ。」とのお話でした。その後大変話が弾んだことは、言うまでもありません。

このように、たまたま古い共通の知人があったことなどを通じて、また、私が内閣外政審議室の創設時に内閣審議官として勤務し、歴代の外政室長や審議官とも交流があったこともあって、石井先生は、ずいぶんと私に信用を寄せられ何事につけ相談をさせていただきました。また

私の方からも何度も先生のお知恵をお借りいたしました。石井先生のような現代の知的巨人と親しくお付き合いする機会を与えられた幸運に、今も深く感謝している次第です。

アジ歴の検討段階において、アジア歴史資料の現状と所在、アジ歴の機能とシステムなどアジア歴史資料センター（仮称）の設立構想の具体化のための調査研究が、内閣外政審議室から（財）日本国際交流センターに委託されました。交流センターの山本正会長の下でこの委託調査に取組み、この調査報告書の実現のために石井先生等と共に尽力し、アジ歴発足後は専門員としてアジ歴の活動全般を主導し、最後は国立公文書館の公文書専門官に就任してくれたのが、牟田昌平さんです。牟田さんは大変残念なことに昨年9月に1年余りの闘病の後亡くなりました。牟田さんを失ったことも、当館にとって、アジ歴にとって埋め難い損失でした。

私はこの頃、「今ではきっとあの世で、アジ歴の設立に向け共に戦った石井先生と牟田さんが、私たちのことをじっと見守っていてくれて

いるのだろうな。二人だから語り合う話題も尽きないだろうな。」などと想像しつつわずかに心を慰めています。お二人の大きなご功績に心からの敬意と感謝を捧げると共に、私たちに先立って逝かれたお二人のためにも、残された私たちが力を合わせて、よりよいアジ歴、公文書館を作り上げるよう努力しなければならないと心に誓っています。



ベトナム・国立第一公文書センターにて牟田昌平アジア歴史資料センター調整専門官と共に（2006/03/15）



第16回 ICA クアラルンプール大会にてイアン・ウィルソン ICA 会長、菊池光興 ICA 副会長と共に（2008/07/22）